

研究結果報告書

本研究では台湾の大学における日本語の専攻者と非専攻者を対象にアンケート調査（2012年9月～11月、全12校1500人、有効サンプル数1267人）を行い、「SPSS」統計法によって検出した結果、両者における日本文化の受入傾向、日本語の習得状況及びその両方の関わり方についての相違点を以下の三つにまとめる。

- 一、文化の受入傾向：両者とも高めの水準に達し、専攻者より非専攻者のほうがやや高くなっている。その中で、日本の自然・風土と国民性に対するイメージが明らかによい傾きで、日本の流行文化に憧れている共通点が注目される。
- 二、習得状況の相違：非専攻者はこれまでの学習効果と学習満足度がやや高く、学習の持続力が比較的弱い、もっと日本語能力を高めたいとの意欲が強く反映された。就職に役に立ち、検定試験に合格したいとの目標を明確に示した専攻者と対照に、非専攻者は日常生活での応用能力や会話能力等の重視がわりと顕著に現れている。
- 三、文化受容と習得状況の関わり：受入程度によって、学習状況も異なってくる密着な関連状態が両者とも検出された。要するに、専攻と関係なく、学習者のもつ日本文化に対するイメージ、見方は、日本語の勉強志向や、学習意欲、さらに学習効果等に強い影響をもたらした特徴が目立っている。

以上から示唆を得た今後の課題とは、まず、「道具的志向」から「統合的志向」へ：とくに専攻者の場合、日本語で「ビジネスできる」から「コミュニケーションできる」への重視をはじめ、異文化理解の深化や世界観の形成、国際視野の拡大等を図ること。「機能的」目標を明確に：とくに非専攻者にとって、日本語を“習う”より、“使う”ほうに重点をおき、日本語による意思伝達能力と情報検索能力を強化すること。そして、文化を取り入れた日本事情科目の増設：専攻と関係なく、身近な日本との関わりから“日本を知るため”の立場を見直し、文化を超えて人間関係を作る能力の育成といった人間教育の取り組みが肝要である。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

- 1 「台湾の大学生における日本文化の受け入れと日本語の習得状況
—専攻者と非専攻者の比較を中心として」
林麗娟 「2013年度台湾応用日本語国際学術シンポジウム」
2013年9月3日 台湾 国立高雄第一科技大学応用日本語学科
- 2 「日本文化の受容傾向と日本語の習得状況に関する関連分析
—台湾の大学におけるアンケート調査を通して」
林麗娟 「2013年度日本言語文藝研究国際学術シンポジウム」
2013年11月30日 台湾 長栄大学応用日本語学科

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

林麗娟 「台湾の大学生における日本文化の受容と日本語の習得
—専攻者と非専攻者の比較を焦点に」
台湾 国立政治大学外国語文學院『外国語文研究』第19期, 2013.12

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）

林麗娟 『文化の受け入れと言語学習に関する実証的研究
—台湾の大学生から考察する』
台湾 豪風出版社, 2014年5月